

「一億総活躍社会」

2015年10月12日

安倍首相は「安保関連法案」を成立させた後、来年7月の参議院選挙を目指して、経済優先政策を強調している。内閣改造を発表し「一億総活躍社会」と銘打ったアドバルーンを揚げた。「一億総」という言葉を聞いて、二つのことを思い出す。一つは「一億総懺悔」である。敗戦後、戦争責任は国民全体にある。これを懺悔し、新国家を作ろうという意味であろう。しかし、この言葉には主語がなく、曖昧模糊としている。むしろ、敗戦の責任を天皇に謝罪するという意味合いが込められた言葉であった。戦争責任を「一億総懺悔」という言葉で曖昧にした結果、責任を明確にしない社会構造が醸成された。戦争責任を厳しく問うたドイツは、それに相応しい政策を追い、国際的にも信頼を得ている。

二つ目は、辛口の社会評論家の大宅壮一氏が、テレビが普及し始めた頃、「一億総白痴化」と言った。低俗なテレビ番組によって、想像力や思考力を無くし、国民全てが白痴化すると評した訳である。これは当たっているのではないか。最近、スマホの普及によって、情報は安易に、多く得られるが、真に考えるべき力を失っていることは確かである。伝えたくても伝えられないもどかしさから生まれる思想の深さ、安直な短文でなく、推敲した文章の強さなどを無くしたくないものである。

安倍首相の「一億総活躍社会」は「新三本の矢」だそうである。第一の矢は、国内総生産を600兆円とする矢である。経済界からはとても無理な数値だと言われている。経済的に豊かになることが至上の価値とされているが、経済成長は消費を促すことであり、それは資源の浪費となり、地球を痛めつけることにつながるのではないか。そして、世界は異常な経済成長を期待できる状況にはない。徒な経済成長や無益な支出を慎み、公平な分配を模索する理念、哲学が大事であると、私は思っている。

第二の矢は、出生率を1.8に伸ばす矢である。子どもの出生率を上げるためには、それなりの社会基盤が必要である。保育園の充実、教育環境の整備、夫婦で働けるような会社の態勢などができるのか。これらの体制を作る具体策を聞きたいものである。有名俳優の結婚が報道された時、菅官房長官は「この結婚を機に、ママさんたちが一緒に子どもを産みたいとかいう形で国家に貢献していただければいいなと思う」と発言していた。驚き入った。国民は国家に尽くすためにあると言わんばかりである。国民主権など、頭の片隅にもないようである。このような国家主義者が政治を行っていることの恐怖を感じた。

第三の矢は、介護離職ゼロを目指す矢である。私の牧会の後半において、会員の高齢化により、有料老人ホーム、特養老人ホーム、老人保健施設、グループホーム、ケアセンターなど、30施設以上は訪ねた。そこでの介護者の苦勞を見聞きした。大変な仕事で、それに対する給与は極めて低く、離職は日常茶飯事である。ホームでの老人虐待事件が報道されるが、介護者たちの精神的荒廃、経営者たちの営利主義を危惧すると同時に、介護のきつさと給与の低さから、あり得ることと思われる面もある。老人になることは赤子に帰っていくことなので、人の世話を受けざるを得ない。そして、需要は、年毎に増えていく。介護者の職場環境と給与が改善され、離職率ゼロになれば、老人たちの救いとなる。

年金は減り、介護保険料と医療費は増えている。生活保護世帯は年々増え続けている。安心できる社会保障の充実は経済成長にかかっていることは事実である。社会保障と経済成長は個人では負いきれる問題ではない。安倍首相は耳障りのいいアドバルーンを揚げるが、「一億総」という言葉には実態がなく、空しい響きしかない。